

明治三十一年十二月二十六日 禮拜日 信省認

明治三十三年九月一日 發行

目 次

社 說

◎基督教徒の望む

◎社會事業(其二)

論 說

◎北海道教育策

文學士 本 多 高 陽

社 會

◎内務省令と東本願寺◎政黨と宗教◎

清國事件の一段落◎基督教徒の社會事

業◎所謂廢娼運動◎印度飢民の蘇生◎

小學校令改正

雜 錄

◎航暹日誌(承前)

◎參會雜記(承前)

百目木劍虹

信 冢

◎四相觀

文學士 五 城 學 人

會 報

◎能登輪島町并に田嶋◎加賀小松町少
能登輪島町并に於ける講演

改 教 時 報

第三十八號

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、政教問題を研究して、政府をして公認教制度を立てしむる事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

○政教時報第三十七號目次

社説	恤兵の必要	◎社會事業
論説	予の道徳論	(安藤鐵騎)
社會	宗教法人設立規定等	
雜誌	北遊雜記	(本多高善)
信界	◎航運日誌	
會報	不動の心	(清澤清之)
	各地の教信	

本誌廣告

一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
 一、本誌代金は必ず小爲替にて送附の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	無
				送
				送
				料

◎廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十三年八月廿一日印刷
 明治三十三年九月一日發行

發行無編輯人
 印刷 人

上村幸三郎
 清水朝太郎

政教時報

基督教徒に望む

予輩が斯る問題を論ずるは、世話に所謂「入らぬ世話やく」といふものにして、他人の事を穿鑿せんよりも寧ろ自分の足許に注意せよと一言にやり込められんかと、中心甚だ不安の思ひに堪へず言はんを欲して口訥し、書かんと欲して筆を抛つもの數々なりき、然れども數月以來感はつゝ來りしことなれば遂に嘿止し得ずして茲に一段の勇氣を鼓して公にするに至りしも筆端猶窘束して生來會て覺えざる一種不安の感に打たれて、殆ど思ふ十分の一をも告白し得ざるものあり、然れども基督教徒は現今及將來に於て確かに我邦の一勢力にして、其舉動の如何は我國民全體に影響する所決して尠少にあらざるべければ、力めて公平の觀察を以て注文を呈せんと欲す、請ふ基督教徒諸氏も虚心平氣を以て予輩の言を容れられんことを、諺にいふ他人の商賣は善く見ゆるものか、予輩は平素基督教徒の熱心なるを、其言行の眞摯なるを、其言の誠實なるを、其居たる者なり、其機敏にして有爲の氣象に富み、殊に社會的慈善事業等には奏功多きを賞揚しつゝあるものなり、然り實に着眼敏にして事功的精神に富むは隠れなき事實なり、然れども餘りに其方面に馳せて眞摯の態度、熱誠に神の福音を宣傳するといふ精神に至りては昔日より減せるの觀無き歟

如何なる氣運にや、最近數年來世界の隅々まで殘る限もなく、帝國主義なる一陣の魔風は吹きさすむなり、此腥風の猛勢と互に相伴して勢力伸張の速に向ひつゝあるは天主教の現況なり、北米合衆國は、世界に於て最信教自由を實施せる邦土と稱すとも、近來天主教の勢力日に増し、展進して、大統領の選舉運動にも大に關係しつゝあり、各政黨は引いて自黨の援けらしめんと其甘心を買ひつゝありと云ふ、北清の大騷亂が如何に天主教徒と深き關係あるかは、予輩は述べずして寧ろ之を大英國外相の演説に聞かん、

清國の擾亂は今や非常の火の手となり國政上の大問題となりたるも其の初め即ち朝鮮王等が義和團徒を未だ利せざる以前にありて拳匪の起たるは全排基督教主義にあつたを述べ奥都雜報にて刊行する「メスターロイドの所説を援引して曰く支那に於ける基督教徒は同國政府の微弱無力なるに乘じ己れ等には十分なる本國の後援あるを得分無法的手段を以て國人を基督教に誘入し且つ同教を傳播する支那人には見社が之を容れざる罪惡あるも却て之を曲庇するを乞ふる支那民の惡感情を買ひたるは畢竟宣教師の神聖なる教旨を傳道する人の身として爲すべからざる非行にして其の事情は漢口、上海、厦門、天津等各地に於ける自耳義領事館の本部に報告したる公文に依り各地の情勢殆ど同一態に出づるを以て之を知るべし去つたに固陋なる支那人は宣教師の行動を見て一層心懸く感じ初めに單純なる排基督教主義の團圓を造りて同教を虐げ教會堂を燒きたるが基督教徒を攻撃する其事は遂には歐洲人全體を敵視するの心を醸成し初めの排基督教徒は漸く排外人熱と變じたるものなり而して同教宣教師に比較的冷淡なる支那人は支那人の怨みを買ふことも比較的少なりしを以て宗教上に對する排教の念は支那人に對して案外少かりしなり支那人の兇暴より恐むべしと雖も斯る暴行を敢て遂らしめたるは宣教師亦與りて責ある事を必せざるべからず故に歐洲人と支那人との間に永久の平和を保たんと欲せば各國政府は支那に於ける傳道に關して充分なる監督を加へざるべからず云々

大英國の大政治家と雖も誤謬の觀察なしとは斷言すべからざるも、何人の目にも如上の如く見ゆるを如何せん、近世傑出の大政治家、獨乙の鐵血宰相が會て天主教徒征伐を

行へるは、氏が施設に於て最失敗に終りし一事なり、後には氏も大に政策を改めて、支那に於ける天主教宣教師の運動を助けて、以て其殖民政略に利用し始めたり、かの膠州灣占領の如きは當に其遺謀と看做さるべきものなり、天主教徒のみ爾り、他の基督教各派の敢て關する所にあらずといふか、予輩は曾て立派なる日本基督教者の口より、布哇傳道に對する基督教の功徳を賞讃せるを聞けり、亞弗利加土人教化の著しきを聞けり、而して今や布哇は何の狀ぞ、亞弗利加に於て基督教の教化に浴せる地は何人の領する所ぞ、然れども是等は固より、世界の潮勢もあり、政治的關係もあり、又遠き歐米の宣教師等の非違を鳴らすも田作の切齒に異ならず、又之を以て我邦の基督教徒に責むるも酷なり、故に我邦の耶蘇教徒にして誠實眞摯にして我人も宗教家らしき行爲と許す如きならしめば、予輩は此上に望む所はあらずるべし、如何せん、予輩の眼中には我邦の耶蘇教徒も亦、眞摯の氣象は漸く消磨して、投機的裝飾的行爲多からずやと映するものあるは、大に遺憾に思ふ所なり、

回顧すれば、數旬以前におほけなくも世に所謂不敬事件なる出來事ありき、かの執筆者の如きは、予輩は全く病的行爲に出づるものならんと信する者、且や國家おのづから、典刑の具れるあり、固より司直判官の公明に一任すべくして予輩の是非すべきにあらず、又縱令彼事件が平素耶蘇教主義を奉ずる人士間に起りたりとて是固より一二の輩の心得違より起りし出來事にして全體の耶蘇教徒を責むべき筈も無き事なり、

然るに予輩の恠訝に堪へざるは、彼事件の起るや、該教信者の棟梁は倉皇相會して一の申譯書を公にせり、其申譯の要領はかの不敬なる文字の起草者は基督教の何れの教會にも派にも屬し居らざる一未丁年者の所爲なれば、余輩基督教者にも何等の責任なしといふに止る、余輩は三百代言の辯論として尤として之を首肯すとも雖も、眞摯なる宗教家の態度として頗る憚焉たらざるの感を抱けり、基督の心を以て心とせる者ならしめば、斯る時に當りては幾分諷は(多きを責めず)自らも反省し、又同教徒にも反省を促すべく、又かの寧ろ憐れむべき執筆者等のヒガメル心を悔ひ改めしめんとを神に祈るべかりしなり、基督は予輩決して信奉する所にあらずとも、又決してか一流の人士の如く、病める者の爲に祈らずして却て撞き倒すの如き行爲は有るまじと信するなり、北清騷擾に關しても、彼教徒は慰問使を發して、又各國軍隊を慰問せしめて大に其間に期する所わらんとする如しと聞けり、予輩が傳聞する所の如くんば、其所期亦餘り頼もしからざる裝飾的事業なるが如し、上に既に言へるが如き、這回の擾亂は基督教傳播に干する事多しとすれば、人道の爲、東洋平和の爲、否眞實なる基督教を自身の爲にも、我邦の基督教者の盡すべく働くべき分野は廣漠多大なりといふべし、眞個に這回の北清の擾亂こそ、我國の耶蘇教者諸氏が、大活劇を演ずべき檯舞臺といふべし、何ぞ唯區々たる慰問位にして止むべけんや、又我帝國内に於ても從來耶蘇教徒中最盛なるは加特力教にして、耶蘇教信者總數十一萬中過半は此派に屬

社 界 事 業 (其 二)

するなり、此羅馬法王に直屬せる舊教は今後も猶益盛にして殆ど他諸派を壓倒せんとする勢あることは恰も歐米に於て近來同派が非常に勢力強く、又支那に於て勢よく宣傳すると同比例のものありといふ、我邦に於ける該派宣教師等は、固より支那などに來れる輩と選を異にして、其本國の爲に國事探偵となる如きことはあらずるべしと雖も、如何にせん國土を異にし、人種を異にし、言語宗教を異にせる者、有事の日ならずとも、又強ち油斷すべからざるものなしとも斯言すべからざらん、佛教徒が是等の點に公平に注意すべきは勿論ながら、基督教徒も心あるものは留意に怠らずして、猥りに世界主義とか、人道主義とか、博愛主義とかに安心せずして、一日も早く眞個獨立の傳道をなせ、動もすれば資を外國に仰がんとする陋習を捨てんことを望まざるを得ざるなり、之を要するに、余輩の希望は眞摯なれ、獨立なれといふに在り、而して此二個の注文は恰も我佛敎界にも適中するものなるを不思議なる、

社會事業の最根本にして最必須なるは、孤兒院に在り、可憐の孤兒の收養十分に行届けば、犯罪人は殆ど半減するを得べし、悪少年及在監人の再犯以上の者の墮落の道行を調査すれば殆ど悉く孤兒ならざるはなし、而して其道行といふもの即本誌が嘗て掲載せし所の窮兒惡化の狀況といふものに外なら

ざるなり、故に社會事業として最先最急に着手盡力すべきは孤兒院にして、最後に廻して宜しきは監獄事業なり、而して斯る社會事業に従事するに於ても最功を奏すること確實にして多きは、亦孤兒教育事業にして、監獄事業は、奏功最不確實にして少なきものなり、然るに現時監獄に付ては改良論を擧ぐして注意する人士多けれども、孤兒教育事業等は猶未だ注目を惹く事多からざるは惜むべし、然れども歐米先進國の例を見るも、先づ注目を惹いて改良を叫ばれしものは監獄事業にして、此事業に着手すれば、漸くに再犯者を出さざらん事を欲するより出獄人保護事業の肝要なるを悟り、又一旦入獄せる者は改過遷善の困難なるを知り、入獄人を減せんどの考より、不良少年感化事業を起し、夫より猶一層根本に廻りて孤兒教育事業起るを常例とす、而して後漸く、社會事業の配列に於て、孤兒教育は最たり、監獄改良は殿たるを知るなり、英米獨佛の如きは今や是等の諸機關漸く整備せしを以て、目今其働き何れも著しくなれりと聞く、我邦は猶他諸事業と同しく、社會事業も亦創業に屬すれば固より備らんを求むべからずとも雖も、已に是等の配列に於て理論といひ、經驗といひ明なる以上は、一日も早く孤兒院、感化院等に意を注がん事、蓋急要にあらずや、固より余輩前號に論せし如く、諸事業相聯絡し相扶助して、事業の進歩を圖るは急要なれども、監獄改良は既に着手せり、感化院法は發布せられて、既に世人の注意に上れり、故に今は殊に孤兒教育事業に就て世人の注意に訴へんと欲するなり

北海道教育策(北遊禪記の五)

本多高陽

何れの地にも不足して居る小學教員は、北海道には一層拂底であらうといふ事は何人にも想像せられる所であるが、あの地へ渡りて實際を見ると實に其想像通り否寧ろ想像以上である、自治制を施されて居る都會でさへ小學校の數は足らなく、學齡兒童の入學志願者を盡く入校せしめることが出来ず、又何れの學校でも斷ぜず教員に欠員がありて閉口して居るといふ實状である、少し田舎へ出て見るなら夫は憐れ至極である、統計に付て見るならば、其全道に於ける小學校の數は公立三百五十一校、私立三十一校、合して三百八十二校しか無いのである、如何に人口は稀少であると言たとして、あの廣い北海道全道の學校の總數が、最も全國で普通教育の志はあといふ東京市だけの學校數と伯仲の間にあるのは驚くではないか、殊に半年間は霜雪に埋まりて居る彼地で遠隔の地の學校へ年尚も行かぬ兒女の通學は、何程可愛そうであらうか、ソレいふ鹽梅であるから、教育事業は極めて進歩がおそい、統計表の上丈けでも

男	就學 四四八八九	女	就學 二二五七八
	不就學 四四八八九		不就學 五一四五五

(明治三十年の統計表に據る)

男子ですら就學兒童より不就學の方が超過して居る、女子に至りては、不就學の方が二倍半にも達して居るとは驚くでは無いが、猶實際を見れば年々の移民民などありて、不就學兒童の數には餘程違算があるに相違ない、して見れば北海道の人民は此次の時代になりても人口三分二は眼に一丁字なき人民の住所であるとは情けない話である、夫なら就學兒童は十分なる教育を受けるかといふと、是亦内情は話にならぬ様である、前にもいふ通り教師の欠員の多いので、統計表で見ても、教師一人で生徒七十幾人つゝ受持たねばならぬ、大きな學校で一學級の生徒の數の多い所ならいざ知らず、小さな學校で斯様多數な生徒の受持たれる筈がない、夫で教員は各學校の引張り合である、夫からして言ふべからざる弊害が澤山ある、即教員は不適當でも、學力が足らなくとも、又不親切でも不品行でも詮方なく我慢して雇ひ置くのである、現に過般も學校の教師が同校の女教師及女生徒を強姦した、夫は餘り甚だしいから免職に成たが、夫程甚しく無いのは道廳でも支廳でも又人民でも見通して置く、或る學校では男教員と女教員と互に好い交情になりて、二人して男教員の妻を虐待する、其事は生徒も父兄も熟知して居ても、二人も解雇すれば閉校せねばならぬを恐れて其儘見通して置くといふ話を聞いた、僕はこんなのを一々事實だと受合ふ事は出来ぬが、或は生徒の父兄より賄賂を取るとか、或は不品行の結果借金が嵩んで逃げ出したとかいふ話は随分多く聞いた、中には餘り教員が不足の爲閉校同様であるのも常にあちこちにあるとの事

である、北門の鎖鑰といふ此地の教育の有様はこんなであるとは心細い事ではないか、併しながら、種々の困難に迫られて戀しき生れ故郷を捨て遠く蝦夷地に來て辛酸を嘗め居る父兄、移民會社の詐僞同様な旨い口車に乗りて移住して日夜辛苦に泣き明す人々を咎める事は固より出来ぬ、それかどて捨てしは置かれぬではないか、總じて北海道の人民は愛郷心が少い、一儲けして衣食に心配が無くなれば夫こそ錦を衣て故郷へ歸らうとは、十人が八人までの考へである、固より今後一二代も過ぎたら此出稼の根情も多少減ずるであらうが、此愛郷心を生せしめるには普通教育を盛にして北海道に關する智識を與へるは確かに一捷徑であらう、ドノ途からいふも斯様な教育の有様を放任して置けない事は無論である、要は唯如何にして此地の教育を進めるかにあるのである、此點に關しては文部省でも又道廳でも各親切に考へて貰ひ度ひ、僕も固より名策も無いが、試みに思ひ付いた事の増を述べて見やうならば、マア斯うである、別に六ヶ敷い事でもない、昔の寺子屋の再興である、全體他郷にさすらへて泣いて居る者を慰藉するは宗教家に若くも無い、けれども宗教家なる者は不生産的の者であるから、貧困なる住移民の村落では、此遊民を養て置く事が出来ぬ、夫で殖民事業には必須缺くべからざる宗教家が往々缺けて居て拓殖の事業が面白く成功せぬ、各宗で随分説教場などを設けても經費に差支へて遂に建物は有りながら住僧も居ないといふ奇觀を呈する事は前にも述べた通りである、文部省若くは道廳で此等の説教場を學校に充

て、其住僧に生活費を與へて、其土地の兒童に讀み、書き、算術位を教授せしむるならば、教育の爲、拓殖事業の爲、宗教の爲、何程助成するかも知れない、その方針さへ定れば、何府縣にても何百人の移住者ありといふ時は、豫め一人の僧侶を同伴せしめて移住せしめる事が出来る、此方の考から言へば教師でも構はばぬ、公平に見ても現今の教育者は宗教家よりも今一層意氣地がなくて、献身的に癡癡の氣を賣してでも出掛け様といふ者は少い、且内地に何程も位置があるか、ソナナ遠い蝦夷ヶ島へ移住民と共に行かせやうとしても迎も駄目である、けれども僧侶や教師なら随分出掛けやうと思へる、愈々するならば、建物は其宗旨から建てさせるとか何とか細目はイクラも定め様もあらう、教育と宗教との分離とか獨立とかいふのは御江戸の真中でいふ事である、殖民地の教育といふものは古今東西共に苦んで居るので、如何にせんかとは大疑問である、斯る場合に教育宗教獨立などは持出すべき議論ではない、早い所が函館の如く内地同様開けた土地でさへ、宗教と教育と分離せしむる事が實際に出来様か、斯る議論は時と場合により斟酌せねばならぬといふ事は異論もあるまいから、北海全道の爲に否日本の爲に、何とか此邊に特殊の規定を設けて、宗教家と教育家と相輔けて、速に幾萬の子弟をして新聞の一枚も讀み得るものとして貰ひ度ひ者である、そうすれば宗教力を以て拓殖事業に益する事も莫大なら、教育事業も益進み、我北門の守り一層の堅固を増し、三方四方益ありて害は無からうと思へる、

右の一篇は前例に依り雜錄欄に納るべきなれど、全く論議
文なるを以て、本多氏に請ふて、今此欄に收む、

◎内務省令と東本願寺

今回内務省令第三十八號并に第三十九號を以て公布せられたる、法人設立規定、寄附負債募集に關する二省令が、如何に東本願寺を打撃したるかを敢て吾人の喋々を要せざるべし、之を内務省の側より觀察を下さんか、民法施行法の法文の不備を補はんとして發布したるは素より論なきのみ、是を以て東本願寺を打撃したりと思ふは寧ろ吾人の辭論に過ぎざるべし、然れども偶、東本願寺が債券を發行し負債整理の道を講ずるに當り、此省令の出るに共に斯波宗教局長より宗派は法人たるを得ずとの通牒に接し、好成绩を以て盛に募集したる債券は遂に中止の止むを得ざるに至り、東本願寺の困難一方ならずと云ふ、これをしも打撃といはずして將た何をか打撃といふや、顧ふに吾人が一たび宗教法案の提出さるゝや、絶對的反對の態度を取りし所以のもの、宗派法人説は其主張の眼目なりき、然るに政府は宗教法案否決せられ見事失敗に歸したるにも拘らず、尙其意志を繼ぎ再び姑息にも宗派に法人權を付與せずと決定したるが如きは、何ぞ國民の輿論を無視するの甚しき暴も亦極まれりと謂ふべし矣、抑省令なるものは命令の

一種にして、其遵奉の効力に於ては他の法律と少しも異なる所なし、獨り東本願寺のみならず各宗派悉く之を遵奉せざるべからず、其影響の及ぶ所當に一宗派のみならず、就中財政整理上大頓挫を來し鐵鎚を其頭上に加へられたるものは東本願寺ならむか、

試みに省令を取りて讀過するもの誰れか其煩に驚かさむや寄附負債の募集をなすに當り、募集の目的、募集の方法、募集の金額、募集の區域、募集の期間等を記して一々地方長官を經由して内務大臣の許可を受けざるべからず、而して其募集に従事するものは住所、氏名、職業、年齢を記して是亦地方長官の認可を受くべしと規定せり、法文としては非常に緻密に少しも粗漏なく遺憾なく規定されたりと云ふも各宗派は法文の如く之を實行せんと欲せば恐くは其煩に堪へざらむ、否到底法文の如く實行を遂ぐることは能はざるべし、募集の區域并に募集人を定むるが如きは殆どなし能はざるなり、募集區域の如き日本全國皆區域なりとせば如此茫漠たる區域は内務省は果して之を許可するや否や、募集の如き從來一定の人数を以て限りたるにあらざりて多數の信者か相集り之を勸募し時に全村を擧げて募集する事もあるべし、一定の人員を限りて之が勸募に當らしむるが如きは到底爲し得べき所にあらざりて、其効も亦決して收むる能はざるなり、各宗の財源は信徒の精神の溢るゝ喜捨或は寄附によりて漸く派内の自治機關を運轉するものにして、今此省令の爲めに一大堤防を築かれ殆ど財源を杜絶せられんとす、内務省は各

宗派に向て暗に餓死を迫るもの、如し、酷なること如此し、更に附則第十條には募集の完了に至らざるものは、其部分に對し本令を適用すと規定せり、更に酷の酷なるもの、此附則や實に東本願寺を打撃したる證左にあらざりして何ぞや、東本願寺なるもの今後果して如何の行動に出でんとするか、曾て羅馬法王を以て目せられたる東本願寺は果して腰を折り膝を屈し拱手黙々たらむとするか、知らず捲土重來當年の意氣を示すや否や、

近來内務省の宗教に對する處置多く正鵠を失し、派内の自治を害し靜論を紊すこと多し、彼眞言宗紛擾の問題に對する處置の如き、益々粉擾を醸したるの結果小派の獨立を許し、明に宗派の滅却を速ねくに至りたりと云ふべし、猥りに分離を許さずと規定しおき、自ら分離を許すが如きは、内務省の威信地を拂ふて失墜するのみならず不法の責も亦決して免るゝ能はざるなり、併せて一言する所以也

◎政黨と宗教

我國の所謂政黨なるものは眼中射利獵官の外、何等の主義なく、主張なく、節操もなし、况や國家、況や宗教をや、彼の歐米各國の政黨が宗教の事項を其政綱の一に加へ宗教的行動をなさんとするに比すれば、雷に雲泥の差のみならむや、

往年國民協會を解いて現時の帝國黨を組織するにわたり、我國古來の宗教を以て其綱領の個條に加へんとして物議を生じたることは、今尙は吾人が彷彿の裡に記憶する所なり、將に生れんとする新政黨に就ては屢に一言を述べて聊か注意を促

したりき、今や機運圓熟愈々新政黨が旗幟を擧げんとすど聞くと、其綱領の如きは伊藤侯一人の署名によりて發布すべしと云ふ、綱領の如何は吾人門外漢の窺ひ知る所にあらざりて雖も、從來の慣例によれば宗教の如き全く度外視するや炳乎として火を觀るよりも明ならむ、如斯大政黨が宗教を無視すると吾人憤らざるにあらざるも、顧みて教界の萎靡として尾大振はす勢力の微弱が遂に之が一大原因をなすを思へば吾人は實に天を仰いで浩歎に耐へざるなり(八月廿三日稿)

◎清國事件の一段落 各國聯合軍の北京に進入の報をき、て、誰か清國事件の意外に重大なるを想はざらむや、更に北京陥落の電報に接し再び其意外に驚かざるを得むや、各國出師の目的が北京公使の危急を救ふにありとせば既に其目的や達せりと謂ふべし、所謂清國事件は茲に一段落を告げたりと云ふべきか、清國皇帝は既に蒙塵し玉へりと云ふ、清國政府の存在は果して何處に認むべきか、要するに今後の方針こそ最も重大事にして外交の手腕を振ふべき正に此時にあり、公使救済の段落は告げたりと雖も全局の大段落に至りては未し、吾人朝野の輿論未だ多くを聞くを得ず、之を廿七八年の戦役に比すれば實に寂寥の感なきを得ず、時勢の變遷然らしむる所以歟、抑他に原因の存するあるか、吾人竊に痛嘆に堪へざるものあり、敢て同感の士に訴ふ

◎基督教徒の社會事業 現今社會事業として其表面に顯はれたるものにも實に教百に下らざるべし、而して是等の事業多くは基督教徒専有の觀ありとて、社會記者は數へ

て曰く

安藤根木氏等の禁酒事業、矢島磯井氏の婦人矯風會、潮田氏の醜來婦救濟事業、石井十次氏の岡山郡兜院、原胤昭氏の出城人保護會、石井亮一氏の瀧川學園、留岡氏の家庭學校、三好氏主唱の養育院感化部、松村氏の社會教育會、片山氏等の勞働組合、其他職工教育會、都市問題研究會、安部氏等の社會主義協同會、貧民救助會、各地方の青年會、婦人會、島田氏等の廢娼同盟會、日本矯風會等を始め慈惠同濟院等慈善新教徒の手に成る慈善事業矯風事業の重なるもの百を以て數ふ可らず、矯風運動に従ひ、勞働運動を試み孤兒院を立て、施療院を設けて、今日可憐貧窮の輩に同情の涙を流すものは、實に彼等の特色にして其優劣を認むべきものなり、佛敎界に於て之に従ふもの近時漸く多きも、其主動者にして世人の耳目を惹くに足るものは基督教徒の事業なるが如し

と、それ或は然らむ然りと雖も社會事業、慈善事業に盡す彼の徒や、果して一心端意溢るゝが如き同情熱涙の喚發によりて此等の事業に着手したるものなるか、美名の下醜奴あるは吾人の屢々見聞する所、彼徒や巧に外國傳道會社の資金を欺瞞し、竊に自家囊中を肥し宏壯なる第宅に安座するものなきや否や、然らざれば社會事業、矯風問題の美名を冠して公然耶穌の教線を開展する唯一の手段となさざるはなし、彼等の心事概ねかくの如し、陋なる哉彼徒、

願ふに社會事業は神聖ならざるべからず、一身の營利を計り教線を擴張せんとする所謂野心家の社會事業は、之によりて救濟されたる社會は更に公明正大なる人によりて再び救濟せざるべからざるの不幸をみるに至らむ、社會の勃興は其國の文野を下するに足るとせば、宜しく禍心繁實の伏藏する所を剔絶せざるべからず、吾人は基督教徒の社會問題に熱中するを喜ばざるに非ずと雖も、如斯社會事業の行はるゝは我國前途

彙 録

航 運 日 誌 (承前)

何れにても併置せしむるとし、又た授業料は徴收せしめざるを原則として差當り除外例を設け土地の事情により已むを得ざる場合のみ徴收せしむるを得せしめ、又義務教育を怠りたるものは一つの制裁を設くる筈なりしが該制裁は見合はせたりと、改正の趣意は餘白なきを以てこゝには掲げざるにとせり

●十一日(晴)正午船は北緯十二度三十分、東經百度四十二分、寒暖計八十七度を示す、航路二百三十哩、

午後八時五十分盤谷府メナン河口に投錨碇泊す、此時暹羅王子上陸し玉ふ、岩本千綱本船に來りて面謁を請はる、メナンは河幅最も廣く、兩岸の燈火流に映し金波を玉碎して頗る奇觀を呈す、

●十二日(晴)午前七時暹羅政府の官吏并に日本公使館の書記出迎の爲め來船、小蒸氣船にてメナン河口を溯りて上陸、直に日本公使館に御投宿せらる、他の一行はオーリエントホテルに投す、

午後三時稻垣公使御同伴にて文部大臣、陸軍大臣、外務大臣等の各大臣を順次訪問せられたり、

寒暖計九十二度、日光直下、炎熱燄くが如し、

●十三日(晴)午前文部大臣の來訪あり、午後稻垣公使御同車

の爲め甚だ寒心に堪へざるものあり、吾人を以て妬心に驅られたりとするものあらば、これ吾人の心事を解せざる者、吾人爾かく豈偏狹なるものならんや

●所謂廢娼運動 多少の道德眼を有するもの豈公娼の不可を知らざるものあらむや、吾國の公娼設置は衛生問題又は風俗(淫賣婦に對して)の點より來れるが如し、之を廢止せんとするは洵に事の美なるに相違あらじ、只容易に實行を期し難きを奈何せむ、所謂救世軍の廢娼運動の如きは血を以て血を澱がんとするもの、吾人の未だ俄に首肯し賛同を表しがたき所なり

●印度飢民の蘇生 印度にては去月末よりモンスーン(印度の氣候)吹き始めて充分なる降雨ありたれば今後二三週間内には植付けに着手するを得べく金貨は收穫の見込あるを以て貸出を始めたる爲め窮民も種子を得るに困難を感せずとされば此際印度政府にして、家畜を貸與するあらば久しく飢饉に逼りたる數百萬の印度民も再生の念を爲すに至るべしと其新紙は報せり、因に云ふ去月九日迄米國に於て募集したる印度飢民の救助金は廿四萬二千四百三十圓に上りたる由

●小學校令改正 改正小學校令は愈々去二十日を以て發布せられたり同令は小學校の本旨及び種類、同設置、教科及び編制、職員管理、監督等に關する九章七十有餘條より成り義務教育年限を四ヶ年とし其教科目は國語修身操算術の四科とし高等科をば地理歴史理科の三科目とし該科を分ち二ヶ年高等科三ヶ年高等科四ヶ年高等科とし土地の狀況に應

にて新派本山に參詣、佛像拜觀并に巴里語學校を參觀し玉ひぬ、寺院の規模宏壯金色燦爛として人目を驚かさざるはなし、歸途地方總長を訪問して歸館せらる、

午後八時文部大臣より晚餐の招待を受け、副使并に稻垣公使及び隨行員と共に臨ませられ、夜半歸館し玉へり、

●十四日(晴)午前九時半盤谷高塔に登らせらる、塔は暹羅先帝土石を以て築く所、高さ數百仍全市の光景悉く一眸の裡に萃まる、この絶頂に寺塔を建立せり而して此塔内には今將に我國に頒與せられんとする御骨を納めありと云ふ、拜禮を遂げ休憩の後、歸館せらる、

午後四時國王陛下に謁見の事に定りぬ、文部省官吏出迎として來着し、宮内省差向の馬車にて王宮正門より入る、儀仗兵一隊の軍樂囀腕の聲起ると共に内大臣並に各大臣は玄關に出迎はせられ先づ休憩室に案内せらる、暫くの後宮内大臣の先導にて拜謁所に入りて一同敬禮を行ふ、文部大臣奉迎使參謁の旨を奏し、次に皇帝玉音爽かに左の勅語を賜ふ

佛世尊の神聖なる遺形の一分を受取んが爲めに始めて來れる日本の佛敎徒奉迎使を見るは朕が頗る喜ぶ所なり朕は卿等が千里の波濤を越て來れる誠意に感ず惟ふに南北佛敎は宗規慣習異なる處ありと雖も之れ後世境域隔絶の致す所にして其同祖たるに於て誰れが異議を挟むものあらむや朕は佛敎の先導者にして其保護者たることを承認せられし上は奉迎使に神聖の遺形を分配するは甚だ喜ぶ所なり日本佛敎徒が此神聖なる遺形の分配を得ざりしは彼等が其

一分を得ん事を欲望すべしとは朕が認識せざりし故なり今
や此寶物の一部を得て日本に安置し巡拜の便を得せしめん
とする彼等の願を認容せし上は之を手渡するは尤も朕が欣
ぶ所なり、

奉迎使の此國に來り普通協同の利益の爲め開明の事業に倦
怠なき盡力の程は朕の感謝する所にして日本佛教徒が海外
佛教徒を熟知し一層交際を親密にしたる後は日本佛教の益
々隆盛に到るは朕が偏に切望する所なり、
勅語畢りて新門様奉迎文を奏す、乃ち

大日本帝國佛教各宗派を代表したる眞宗大谷派大谷光演眞
宗本願寺派藤島了穩臨濟宗妙心寺派前田誠節曹洞宗日置默
仙謹で言す

大暹國皇帝陛下聖徳天の如く高く仁澤地の如く潤し爰に優
渥なる聖慮を降し釋迦大覺世尊の遺形を我日本帝國某等佛
教者に頒與し給ふにより各宗派管長は光演を奉迎正使に了
穩誠節默仙を奉迎使に撰用し遺形奉受の任を囑托せり光演
等此任に膺り聖明に咫尺し玉體の清爽なるを拜するを得た
り何の榮か之に加へんや伏て望む陛下外護の力を増隆し給
ひ十善の資を保有し給はんことを光演等誠に恐懼の至りに
耐へず

次に皇帝各奉迎使に握手の禮を給ひ且つ種々の御言葉あり、
式全く畢り一同敬禮休憩室に退く、此時當國皇族御誕生の記
録簿に御沙汰により記名し、歸途内務大藏兩大臣の官房を訪
問し歸館あらせられたり、此日謁見の人々は副使には藤島、前

參會雜記

(接前々號)

百目木劍虹

●坂上宗詮師、眼光炯々、面色土の如く、容貌魁偉決して尋
常一様の凡僧にあらざるを知るべし、師壇上に起ちて禪學を
講するや、快辯滔々會て倦む所を知らざるもの、如し、涼風
一陣の快味を心頭に送られしは、余輩の最も感謝する所、
●師は云ふ、轉た悟り轉た棄るは、これ參禪の要訣と、
●師、近來の座禪を罵ること最も剴切を極む、人真似の爲めに
する者、腦病の爲めにする者甚だ多し、如斯座禪は座禪にあ
らずして邪禪を學ぶものなりと

●某高等官あり、妻子を挈して師を訪ひ參禪を請ひぬ、只腦
病を治せんとての簡單なる理由の下に、
師は例の大口を開き呵々大笑、椰榆一番して曰く、
腦病か、何ぞ夫れふまなる事よ、君には何ぞ不相應の病ひ
なる哉と、
其人沸然として色を作し、席を進めて詰問を放てり、
ふまとは何ぞ、不相應とは何ぞや、避くべからざるものは
病ひなり、醉狂にも誰か好むものあらむ、然るを吾に不相應
とは貴意を了しがたしと、意氣捲げば

師は平然として
君は東京にありて地位相當の俸祿に安せず、一大飛躍猥り
に祿の多からむことを望み心神を勞するの餘、この病に冒さ
れたるべし、所謂五十圓相當のものが百圓を得むとして往々
このふまなる病にかしるとあり、君も恐く其一人ならざるか、

田、日置の三師并に稻垣公使、南條、大草、石川等の諸師なりき、
此夜七時稻垣公使より奉迎使一行を招き晚餐を侑められ、公
使夫妻の懇待をうく、
正午寒暖計九十四度を示す、

●十五日(晴)午前市内寺院を御巡覽、尋て華族女學校を參觀
し午後二時御歸館、
午後五時副奉迎使を始め一同公使館に集まり、暫くの後、馬
車を連れ公使の先導にてワットポー寺院に詣でられ玉へば、
文部大臣出迎へて佛骨授受の式場に案内され、遺形は勅使文
部大臣より黄金製の圓錐塔に容れしま、恭しく之を新門様
に授せられたり、茲に式は全く了へぬ、夫れより列席并に
參觀人に茶菓の饗應あり、同七時公使館に歸らせ玉ふ、此日暹
羅國の貴顯并に在留日本人悉く參觀せり、
午後八時再び日本公使より奉迎使一行に對して晚餐を侑め
らる、

●十六日(曇)朝來冷氣を覺ふ、
午前九時半公使の案内にて王城内の寺院御巡覽、所謂金色燦
爛善畫し美盡さるはなし、大象四頭を庭前に引き來りて御
覽に供せらる、夫より博物館に入り館長の案内にて各陳列場
を御覽せらる、千里の他郷眼に映するもの悉く異材珍品なら
ざるはなし、御歸館の午後四時稻垣公使御同車にて司法
大臣を訪ひ離宮にて茶菓の饗應を享け歸館し玉ふ
正午寒暖計九十度
(以下次號)

否か、

余のふまと云ひしは此事なり、不相應の病と云ひしもこの
理りなり、強ち過言にあらざるべし、如何に〜
某は只黙して答へず、傍なる細君はいと氣の毒げに、座禪を修
しなば吾夫の病も自然に快復の時あらむとて、他人のすしめ
に任せて態々訪ひつるなり、然るべく教を垂れかしと哀願さ
れければ流石の師も懇々として説き、詩々としてさとし還し
けると云ふ、
此一節實に師の直話にかゝる、以て師が平生の性行面目躍如
として眼前に現れ來るを覺ふ、

●原町に出張演說會を開き知名の講師出席しぬ、地方傍聽者
の頭數大小無慮二十人と註せらる、何ぞ知らむ此地濟家の中
興近世の高徳白隠禪師の舊跡ならむとは、而して教化の遺徳
今や蕩然として地を拂うて空し、余俯仰今昔の感に打たる、
こと多し
●一日臥牛洞に遊ぶ、駿灣突出宛も老牛の臥して潮水を飲む
の狀あるより名の因りて起る所以か、灣や水淺く、砂潔く、
且つ波穩に最も潮浴に適を、西北烟波を隔て、斜に相對し青
松白砂の間に隱見するものは、畏くも東宮御用邸、而して東
南近く相面するは伊豆の諸山なり疊々たる連山、淡として一
林の烟の如る呼べば應へんと欲す、余や宛として畫裏の人、

●臥牛山下瀟洒たる館あり、三島館といふ、文久の歳大將軍
家茂公入朝の際、此館に投じられ親しく命名し玉ふ所なりと、
館主世古氏篤實の人、講習會の爲め最も幹旋せらる、此日余

等を遇すること極めて厚し、余の沼津に來りて始めて潮水に浴し心氣爽然たるを得たるは館主の賜、併せて多謝す、山靈水神

●後半の講師と講本は、青巒居士信行綱領を、村上博士は佛敎大綱論を、釋宗演師は禪海一瀾を講せらる、所謂斯界の泰斗のみにして、田光の浦上遠く龍蛇躍る底の壯觀を呈し、吾人をして無上の快感を惹かしめたりき

●青巒居士の能辨なることは今更らひはずもがな、閉會式場に於ける居士の演説は、滿場の會員をして思はず、端座襟を正うして靜聽せしめぬ、

●いつの年なりけむ、青巒居士が柳緑花紅の四大字の額を書して或人に與へけるに、其額如何にしてか静岡市某劇場の正面に掲げられたり、然るに場主は花紅は纏頭呉れないに音相通するを以て、縁喜惡しとて遂に撤したる一笑話の残れるありとて、河野郡長の余に語る所、先生知るや、否や

●余の參會せし時は恰も、自稱元老の一人縱横君の沼津を去られし翌日なりしやに思ふ、この元老先生を懲罰に付せんとすの餘焰未ださめやらざりき、何事の起りしやと問へば、元老先生年甲斐もなく、田舎壯士芝居を見物に行きし事が、端なくも風紀問題として顯れたるなりと、後ち元老先生「新佛敎」紙上に氣焰を吐く、

●余の沼津滞在中晴れの日は僅に二三日、白妙の富士を眺望せしこと只一回、其外ふりみふらずみの天氣とて不愉快此上もなかりき、此地三島に反し水は濁りて飲料に適せず、

の後は、雨が都合よく之を養ふので、再びもとのまゝとなり、而も四相を歴盡してある事である、一週日前に全く何もなき所に、細かさ草が新に生へて、漸々生長し、花を開き、實を結び、生じたる役目を終りて早や病相、老相を歴て、中には枯れかゝりたるもあるといふ、乃ち四相を歴盡して居る事は極めて面白く思はれた、

○生じたるものが滅するといふは何の珍しき事もなく、自分の身なども念々尅々に變化し行くものなれども、其變化を我と我身に感ずるとは薄く、他者の上の事は能く見えるもので、化野の露に袂を絞り、鳥邊野の煙に眼を拭ふたり、桑海の變を歎き、昨日紅顔の青年の今日は白頭と移り變れるに驚くは世の常の事なれども、自分も同様に念々尅々に變化し行くを、實際上に就て深く感ずるとの少きは吾人凡夫の真相である、

○理論の上よりいへば、天地の悠久なるに比して人生の如きは到底比較にもならざる夢の間ある事も、又刹那々に生住異滅の四相を経て、前滅後生して行く事も、誰一人知らざるものはなければ、扱實際の上に就ていへば、我人も五十年は餘程長き様に感じ、霜を戴く迄には随分の年月あれば云々の事も出来る、然かゝの事も爲し得べしと思ふ、又常に目前の状態が終始續く様なる感じがして、明日の白骨などは思ひもよらず、いつ〜までも青年にてあり得る様の感じにて、日常の生活を送り行くものである、

○實際變化し行く身を持ちながら、之を自覺せざるは、其變

且つは氣候の爲め二日計り病床に横るの不幸に遇ひ、會員吉田撫隱君の投藥を蒙り、稍々快復して歸京することを得たるは、余の深く同氏に謝する所、後ち聞く氏は醫を以て業とし且つ熱誠なる信仰家なりと、肺肝を吐露して語るの機を失したるは余の憾とする所也、 (完)

信 界

左の一篇は常盤文學士より、霖雨の漫筆として寄せられたるものなれども、編者は更に四相觀と題し、信界に收めて茲に掲げぬ、乃ち其旨を記して同氏に謝する所以なり (編者識)

四 相 觀

五 城 學 人

○舊梵も間近くなりたので、食後運動がてらに、庭の草を除きかゝれば、寺の事とて、茂みが多いので、蚊蚊の攻撃にはホト〜閉口する、樹陰には殊に多く、曇りたる日には實に非常である、樹陰でなき所は暑くてならず、曇らぬ日は汗が流れて堪へられぬ、いづれにしても長く庭に出て居る事がかなはぬので、一寸やりかけては引き込み、又時を歴てやるといふ有様だ、暑さと、蚊蚊に加ふるに、近日來霖雨が長く續きて、一日霽れては三日も降るといふ次第、左程廣くもあらぬ境内だが、未だ全く取り上げぬ中に、前に取りたる分は、もとのまゝとなる有様である、

○種々の事を考へながら、草を取る間に、最も面白く感じたのは、一週間程前に立派に取り終へたる場所が、僅々の日子化が徐々にして、自然なるによる、凡て自然々に移り行く時は左程に感せぬものなれど、若し此變化を激烈ならしむる時は非常の驚きに打たれ、幾多の悲みに蔽はるゝものである、芝居を観て、或は喜び、或は泣くは、吾人の上に落ち來る諸般の運命が、激烈に來る爲ならん、短時間の中に喜びが涙となり、歎きが笑となり、其變化が如何にも急激なるが爲に、吾人の感情を動かす事が多いのかと思ふ、

○數日前に何もなかつた所に、一面に艸が生へて、早や枯れかゝりたるものも多しといふは、其變化如何にも早く、特に一寸程のものに悉く數十の花を着け、數個の實を結べるといふに至りては、如何にも滑稽とみて面白く思はれた、梅雨の際には艸の成長の早さも素よりの事にて、細かさものは其生死も早きは勿論の事なれども、生老死の諸相の變化の早さは、つまり予が感情を刺激して、甚だ面白く思はしめたる原因なるべしと思ふ、

○有爲轉變の娑婆といひ、無常の世といふは、此變化のある所、乃ち生老死と移り行く所をいひたるものである、森羅萬象悉く念々刻々生老死して行かざるものはない、換言すれば無常ならざるものはない、無常なればこそ、恐も賢となり、生は死するものである、或は左し、或は右し、一となり、又二となり行く、是悉く無常なる所である、世人免すれば無常と歎じ、有爲と悲むが、是は唯其一邊のみを見たるものである、予は無常なればこそ、喜びあり、有爲なればこそ、希

之が因となりて、奮發あり、勉強ありと思ふ、
 ○勿論有爲無常の世なるを以て、其無常の爲に苦み、悲み、歎く場合が多い、吾人の苦の悉く此無常なる所に起因する事は疑ない、然しながら老死のみが無常にあらず、苦艱に沈むのみが無常にあらず、老死が無常なると同時に生も亦無常なり、苦艱に沈むのが有爲なると共に、福樂に上るも亦有爲なるなり、一方に無常の爲に苦み、悲むと同様に、他の一方には無常なるが爲に喜び、樂む邊がある事を忘るべからず、諸行無常とは佛敎の根本原理の一なり、佛は無常なるが爲に生苦あり、老苦あり、病死苦あり、四苦八苦ありと説かれたが、さうながら唯泣き悲みて其生を終れとは宜はざりしなり、無常なればこそ、個々の精神之を磨けば玉と變すべく、吾人の心界瓦礫も變じて金となすべし、奮勵一番、生を人界に享けたる一大目的に向て進めよと説き玉ひしなれ、
 ○若し吾人の精神、天賦の儘にして、如何にするも進退せざるものあらば已まん、苟も儒に流れ、放逸救ふべからざる惡趣に退くと同時に、磨けば燦爛たる光彩を放つ迄に進むべしとの理を知れる上は奮發せざる可らざるは當然の事である、吾人の精神其向ふ所に一任せば邪僻横路に趣くは恰も水の卑きに就くが如くなれども、努力一番向上の氣力を以て之を策勵すれば、一步々々彼岸の大道に進むに相違ない、世に惡あり、苦あると同時に、之を一轉すれば、他に善あり、樂あるは疑ない事にして、而して吾人の精神は退くの性あると同時に之を一轉せしむれば進むの方向に向ふは、自ら其理である、

然し其難易の點より之をいへば力を用ひずして自らに任ず時は退くべく、力を用ひて撓まざる時初めて進むべし、進退の難易は蓋し同日の談にあらざるべし
 ○世に諸般の敎あり、敎のよりて來る所は悉く之を説ける人が非常の苦心と非常の勇氣とによりて向上の大道を進みて、自得する所あり、自得して後、非常の安心あり、満足あり、此安心此満足の味を他に頼たんとて、自己の進みし方向と、進むに關する諸般の經驗とを發表せるものが、やがて敎となりたるものであらふと思ふ、何れの敎によりて我身を律せんとするも、畢竟する所其目的は立敎者の言へる所に吾人の言行を契合せしめんとするにあり、されども、遠慮なく自己の心界を表白すれば、中々左様の次第には參らぬ、省れば省る程自分の拙劣なるのに、自分ながらあきる、ばかりである、
 ○道に向ひ、敎を聞く出立點は、如何なる邊よりぞといふに、予は自分が自分を省みて我は未だし我は凡なりと深く自知する所にありと思ふ、自分が自分を以て未だしきものと思ふ心の甚しき丈、それ之道に進む意が深くなると思ふ、我は高し我は至れりと思ふ人は、敎に入る資格なきもの道に向ふ器に非ざるやと思はるゝ、凹むが故に水之に入るなり、高き所には水の止まる理はなきも、自ら凹む時初て水は之を満たすものなるを忘るべからずと考へらるゝ、
 ○孟羅梵會も間近くなりたる事とて、日夕、日の未だ出でざる時、又は日の没して後、運動がてらに前庭後園の草を取りつるに、屢々霖雨の爲に妨げられ、又は來訪者の爲に、或は藪

蚊の爲に、或は暑熱の爲に思ふ様に抄取らず、漸く一部を取り終へしと思へば早や初に取りし分は徐々青みがしり、一週日程の後には非常の状況を呈すといふ有様に、呆れ果てつれども、扱已むを得ず、復初の處に立かへりて之を取りにかゝれば、前に之をいへる如く、生住異滅の四相を歴盡せるものもあるが、面白く感ぜられて、種々の事を考へ行く中に、無常といふ事に關して、已上の如く取り止めのつかぬを繰り返し考へたのである、
 (舊七月十二日、八月六日記)、

會 報

能 登

◎本會總務員たる文學士眞岡湛海氏は 能登輪島町有志の聘に應じ去月十六日より一週間同地に於て宗教法案の講演をなし其間公開演説會をひらき、同氏は宗教的道德と法律關係を主題にて一場の演説を試み大に地方僧侶諸氏の人心を鼓舞したる由引き續き同國田鶴濱の有志の懇請黙しがたく直に同地に出張講演をなせり

加 賀

◎幼年敎會 加賀小松町の佐々木了應氏等同盟會の事業として幼年敎會を開きしに其成績頗る見るべきものありと云ふ、左に其概要を記して紹介せむ、幼年敎會を開きたるは去る六月一日なりしが間もなく六百五十餘名の多數の生徒が入會し來るを以て十餘名の教員を要する事となり教員の補充一方ならざる困難を招きしが漸く今月

迄持續し來れりと云ふ、最も初め三ヶ月間の速修の見込なりし故今月にて閉會し更に來年六月より再開する事に決定したる由、該會は更に勤行を敎へ傍ら修身を講じ聞かざるを以て目的となし三ヶ月間の成績は教員の不足なるにも拘らず悉く正信偈の素讀に差支なく進歩したるものは御和讃或は御文章を隨意に拜讀し得ると云ふ、是等の生徒は精神上の薰陶に基く者故極めて品行正しく朝夕は家庭にありても肩衣を着し眞面目に勤行を欠さず甚だ殊勝に見ゆるとぞ一郷の風教希くは刷新するを得むか余輩漸次規模を擴張されむことを望む、幼年敎會閉會すると同時に更に
 ◎少年敎會を設立することに決定し是は佐々木氏専ら擔任せらるゝと云ふ規則左の如し
 少年敎會

- 發起者 佐々木了應
 一會日(男子部は毎月十五日午後四時女子部は毎月十四日午後四時右會日には
 急りなく且時間にあくれわやう參會あるべし)
 一會場 小松町稱名寺
 一會費 毎月金壹錢づつ、持參の事(殘餘は貯蓄す)
 一會員 七才より二十才までの人に限る
 一入會手續 自筆にて名簿よくわしくしたるめ前もつて届け出でられよ
 但し本字をならばぬ人は假名にて書くもよし
 ◎前號會報欄 膽南會の所在地を伊香郡としたるは阪田郡の誤に付茲に訂正す

廣 告

- ◎印度饑饉義捐金第三回報告(本會取扱分)
 一金十圓也 堀 庄平
 一金五圓也 堀 庄平
 一金十五圓也 堀 庄平
 一金十圓也 堀 庄平
 同 加賀 能美郡佛敎徒同盟會
 同 加賀 能美郡婦人慈善會

一金十錢 同 小松教務所員 松本 如春
 一金十錢 同 石田 宇兵衛
 一金三十錢 同 岡下 喜
 一金五十錢 同 竹中 茂丸
 一金三十錢 同 吉田 善七
 一金一圓 同 圓山 芳諦
 一金一圓八十錢 近江坂田郡伊吹村善通寺同行中
 一金五十錢 伊勢大湊町 (黒田義忠取次)
 一金五十錢 同 敷名 香徹雄
 一金五十錢 同 進德會員有志
 一金一圓五十錢 同 婦人教會員有志
 能登鳳至郡西町村 日向順照 取次
 北見國利尻郡仙法志村 藪野 市太郎
 近江坂田郡大原村 光蓮寺檀家有志中 (在職黒田義忠取次)
 金一圓 伊勢三重郡朝上村 金藏寺門徒中
 越後 田木 仙藏
 長門大澤郡深川村 林谷 鹿之助
 三河神戶村 本多 教令
 東京 鈴木 戸左衛門
 同 野川 八郎二
 同 都甲 直猗
 一金三十錢 同 遍光寺(取次)
 美濃揖郡春日村
 野原靜神 一三圓五十六錢 同寺門徒中
 淺草 大草 惠實
 加賀江沼郡山中村 富樫味溪募集
 富樫 味溪 一二十錢 易樂 佐次郎
 荒川 岩次郎 一十錢 上阪 和平

一十錢 竹内 藤三郎
 一八錢 中田 藤次郎
 一五錢 村井 幸左衛門
 一五錢 飯田 駒吉
 一四錢 土谷 行慧
 一四錢 澤出 萬吉
 一四錢 山下 文平
 一四錢 又崎 又平
 一四錢 上坂 安平
 一四錢 寺田 吉平
 一四錢 松本 さと
 一四錢 篠岡 甚吉
 一二錢 木田 源七
 一六圓十錢六厘 三河國碧海郡長崎村 藤岡曉了募集
 內譯 西組 一九十八錢 向組
 一八十五錢九厘 猪代山 一四十四錢 藤岡曉了
 一圓廿四錢 東組 一六十六錢六厘 新田
 一圓 日下惣十 一六圓十錢六厘
 大和吉野郡宗檜村大宇平雄 八尋慈薰取次
 內譯 猪岡 彌七 一金五錢 峠 さく
 福溪 多十郎 一金拾錢 井田 富二郎
 平虎 治一 一金拾錢 八尋 ゆわお
 猪岡 善九郎 一金五錢 中井 いへ
 迫前 徳松 一金五錢 平山 力松
 陰地 菊松 一金三十錢 竹本 米吉
 保川 虎治 一金十錢 徳谷 卯太郎

一金五錢 畠山 清五郎 一金十錢 保川 富藏
 一金五錢 錢坊 門吉 一金十五錢 上垣 徳三郎
 一金十錢 龍山 ますみ 一金二十錢 上垣 吉藏
 一金三十三錢 八尋 慈薫 一金十錢 和泉 藤十郎
 一金五錢 畠山 惣七 一金十錢 芳岡 多喜藏
 一三圓也
 越後國刈田郡北條村 桑田從尊取次
 內譯 高井 勸秀 一金二十錢 石川 憲勵
 井上 智性 一金一圓 松木 智榮
 横山 義貫 一金二十錢 佐々木 利劍
 石川 慈恵 一金三十錢 田村 得誓
 藤井 圓順 一金六錢 邊見 義了
 和田 秀健 一金五十錢 桑田 從尊
 田村 智雲 一三圓也 一三圓也
 陸前國氣仙郡日頃市村 長安寺取次
 內譯 金 正樹 一金二十錢 木下 大道
 杉村 義順 一金五十錢 富澤 鳳洲
 千葉 良雄 一金四十錢 佐々木 繁丸
 掛川 順成 一金三十錢 多田 成念
 一三圓也 一三圓也
 長野咸同取次
 豐前國田川郡赤村内田 長野咸同取次
 內譯 長野 咸同 一金五十錢 佛教 婦人會
 青年 道徳會 一金二十錢 渡邊 角太郎
 太田 卯七郎 一金二十錢 徳重 時平

一金十五錢 中村 良助 一金十二錢 太田 盛平
 一金十錢 谷本 忠平 一金十錢 武宮 雪野
 成友 喜熊 一金十錢 川上 伊三郎
 稻掛 岩太郎 一金十錢 谷本 菊枝
 加來 勝次郎 一金十錢 中村 市松
 大田 與三郎 一金九錢 廣瀬 くら
 加來 權次郎 一金八錢 中村 しげの
 谷本 嘉十郎 一金五錢 白石 ぶさ
 佐々木 治三郎 一金五錢 金丸 新平
 大石 その 一金五錢 村上 實平
 太田 卯七郎内 一金五錢 谷本 忠平内
 長谷川 勘太郎 一金五錢 太田 市藏
 金子 ゆみ 一金四錢 金子 善平
 青木 富樫 一金四錢 金子 新平内
 長谷川 茂三郎内 一四圓拾四錢
 尾張國海東郡萬須田村大字前田 眞宗速念寺住職 前田學募集
 內譯 前田 學 一金二圓 前田 少女孝節會
 前田 佛教七々談 同 加藤 幸四郎
 中村 すみ 同 前田 錦楓
 太田 ぎん 同 服部 せい
 大隅 すい 同 加藤 たね
 服部 すい 同 服部 たね
 佐野 梅 同 石原 さし
 萬場 代二郎 同 伏屋 りく
 加藤 義一 同 柴田 清兵衛
 伊藤 ひろ 同 桐山 清兵衛
 柴田 つね 同 渡邊 茂兵衛
 杉浦 庄助 同 渡邊 茂兵衛

Table of names and amounts (e.g., 和野三右衛門, 金四錢) on the left side of the page.

一金四圓也 內譯 福井縣上野順政、三富連成等の取次

Table of names and amounts (e.g., 成林原, 金二十錢) on the right side of the page.

Table of names and amounts (e.g., 松岡善兵衛, 金二圓) at the bottom left of the page.

正誤 前號報告の近江金五圓川松治郎取次とあるは前川松次郎の誤植に付訂正す

Table of names and amounts (e.g., 尾張 榮助, 金一圓) at the bottom right of the page.

計金百四十七圓四十五錢一厘 合計金二百四十七圓十六錢七厘

Table of names and amounts (e.g., 三河國望海郡里村, 金五圓五十錢) on the left side of the page.

三河國望海郡里村 (伊勢祖住取次)

Table of names and amounts (e.g., 柴田仙太郎, 金八錢) on the right side of the page.

Table of names and amounts (e.g., 鈴木新七, 金二十錢) on the left side of the page.

三河國知立町德風會募集 (同人取次)

Table of names and amounts (e.g., 石川吉五郎, 金二十錢) on the right side of the page.

